

目的 戦後40年と経過した今日、才2次世界大戦 戦中戦後のきびしい食糧難時代の食生活体験は、近年、その夙化がはげしい。しかし乏しい食糧供給の下で、如何にして家族の健康を守り、少しでも健全な食生活をとれとくたき、知恵をしほり、工夫をこらしたその内容は、我が國の食生活史研究の上で、見逃してはならない貴重なものと考えらる。そこで私には、この時代の食生活全般と埒りあらし、食生活運営の背景、すなわら食に關わる社会状況と、そこにみられる「食するための工夫」を分析・整理し、これを通してこの時代の、食物摂取に対する姿勢を把握しようと考えた。

方法 調査対象期間を昭和15年1月より同20年12月とし、まず、この期間内に発せられた政令、省令、その他等、食糧行政関係の資料・文書を調査して、食糧配給制度等、食料供給状況の実態を把握、年表化し、同じく同期間内の関係単行本、新聞、雑誌、日誌、回覧板等の記録資料を調査して、家庭における食料調達状況やその工夫、食事内容、調理法等の実態を把握し、食のくらしの知恵を考察することとした。

結果 食糧の配給制は、昭和15年6月の砂糖を度きりに、同16年4月に米、小麦、そして17年11月には青果物全般にまで拡大した。これに対応して、國民の食事内容にもさまざまの工夫がみられ、主食には混主食、代用主食、代用全食といった増量のにめの3体系が、また副食では、動物性食品としていなご、かえる、たにし等、植物性食品としては野草や従来廃棄していた茨、蓼など、そして調味料には各種の代用物が利用されて、食料供給状況の悪化に伴ない、この充足のための工夫や、内容の負的低下が顕著であった。